



野鳥 4 2013年4月号 公益財団法人 日本野鳥の会

**特集** シリーズ鳥と鳥 [2] **尖閣諸島**

03 多様な自然生物相

琉球大学名誉教授 新納 義馬

08 海鳥の重要な繁殖地・尖閣諸島

日本野鳥の会 自然保護室 山本 裕

12 島の人との関わり

八重山日報 編集長 仲新城 誠

# 尖閣諸島

## I 多様な自然と生物相

琉球大学名誉教授 新納 善馬

### 固有性の高い尖閣の自然

尖閣諸島は、石垣島より北北西に170 km、台湾より北東に170 kmに位置する島嶼群で、魚釣島・南小島・北小島・久場島（黄尾嶼）・大正島（赤尾嶼）の5島と、沖ノ北岩・沖ノ南岩・飛瀬の3岩礁からなる。

14世紀の琉球王府時代から、朝貢貿易における航行の際の標識となる島として知られるようになり、その後1884（明治17）年に、古賀辰四郎氏が探検・開拓。アホウドリの羽毛採取や燈籠の製造などの事業を行なった。1940（昭和15）年に島から撤退

して以降は、無人島となり今に至る。

魚釣島・南小島・北小島は第三紀約6500万年前〜260万年前の礫質砂岩が母岩であり、久場島は第四紀260万年前〜現在の輝緑安山岩で構成されている火山島である。島間では、地質・土壌の組成や厚さにちがいがあり、直接あるいは間接的に動植物相へ影響をおよぼしている。

おもに第三紀層からなる魚釣島は昆虫の種類が多く、土壌動物も多い。これに対し第四紀の火山質の土壌からなる久場島は、魚釣島と同じく密林に覆われているにもかかわらず昆虫や土壌動物相は貧弱である。

近年、領有権問題が取り沙汰され、国民の耳目を集めている尖閣諸島には、固有の動植物が多数生息します。また、IBA（重要野鳥生息地）にも指定され、アホウドリなどの絶滅危惧種を含む海鳥の貴重な繁殖地になっています。外交問題はもちろん重要ですが、自然や生きものを保全するという観点で置き去りにされてはいないでしょうか。これまでほとんど知られることのなかった尖閣諸島の豊かな自然について紹介します。





尖閣諸島はアジア大陸に沿った大陸棚の外縁部に位置する。台湾東海岸を北上する黒潮がこの海域で流れを北東に転じ、かつ流速を大きく変え、波浪が高くなるため、各島への上陸は非常に困難である。しかし、この大陸棚に沿う海流と黒潮が混じり合っている潮目によって、魚類が回遊し、これらの魚群を追う海鳥が群生する要因となっている。

一般に、島嶼の生物相の特徴は、大陸や他の大きな島にくらべて種数が少ない傾向があるといわれており、尖閣諸島も例外でない。種数こそ少ないものの、閉鎖された環境の中で種の分化が進み、多くの固有種が見られる(表1)。

また、琉球列島の中で最も人為的干渉を受けていない地域であり、種の多様性を論ずるうえで、亜熱帯の標識となる場所として価値が高い。しかし、過去にまったく人為的干渉を受けなかったわけではなく、短期間であれ開発や調査団の上陸があり、近年では台湾船が海鳥の卵を多数採集したことによる問題もある。

学術的な調査の道は、当時八重山農林高校の校長をしていた高良鉄夫氏(のち琉球大学学長)により切り拓かれた。終戦直後、1950年の第1次調査を皮切りに、沖縄本土復帰前の68年まで5回にわたって行なわれた。以後、70年代の池原貞雄氏による陸生動物の調査をはじめ、たびたび実施されたが、2005年に長谷川博氏がアホウドリ調査で上陸したのを最後に、現在は入島を禁止されている。

生物地理学上の重要性

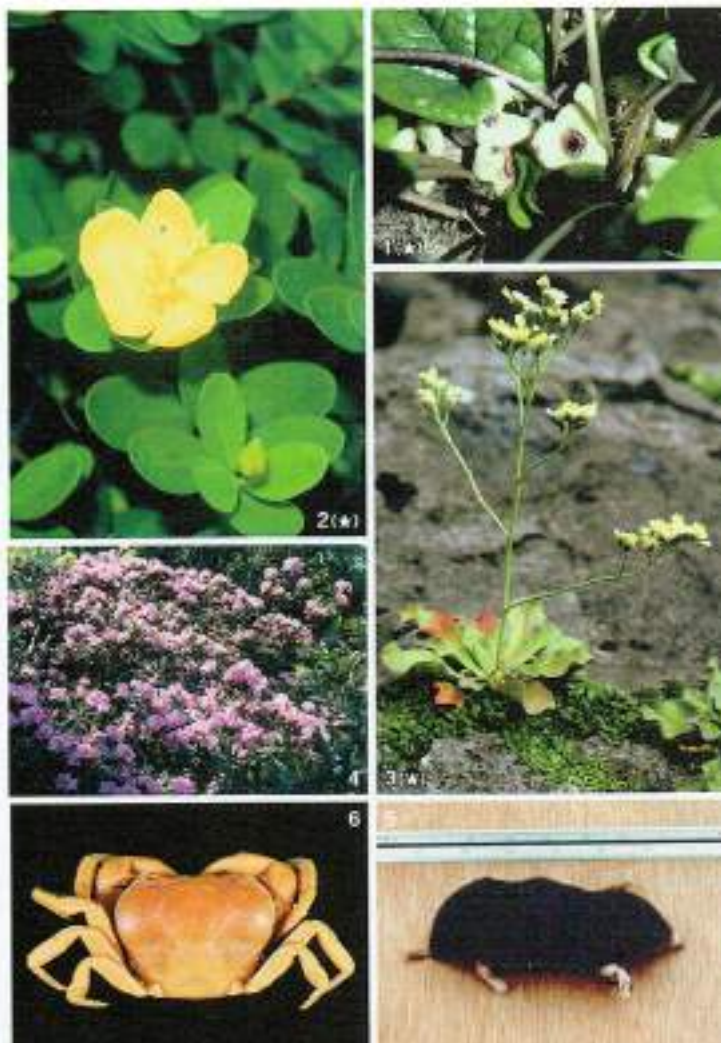
現在は小さな島からなる群島で形成されているが、カンアオイの一種やアマミアラカシなど、陸続きでなければ分布の困難な植物がある点から考えて、もとは大きな陸塊をなした、台湾と陸続きの時代があったと

表1 魚釣島の固有種

植物	<ul style="list-style-type: none"> <li>●センカクアオイ</li> <li>●センカクオトギリ</li> <li>●センカクハマサジ</li> <li>●センカクキヌラン</li> <li>●センカクツツジ(固有変種)</li> <li>●ムラヤキチヂミザサ(固有変種)</li> </ul>
哺乳類	●センカクモグラ
甲殻類	●センカクサワガニ
昆虫類	<ul style="list-style-type: none"> <li>●センカクキラホシカミキリ</li> <li>●センカクスピロキマアリモドキ</li> <li>●ウツリナガキマワリ</li> <li>●オキナワクロオアリ</li> </ul>
両 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>●アンマイマイ</li> <li>●タカラノミギセル</li> <li>●ツダマイマイ</li> <li>●センカクコギセル</li> </ul>

想像される。

台湾・南中国に分布するシニウダ(臭)草が魚釣島・南小島・北小島にも生息し、海を渡って分布したとは考えづらく、このことから、台湾との間に陸橋(※)があったことを裏付けている(初島 1975年)。ただし、久場島には生息



- 1.センカクアオイ / 小さな白い花を茎の根元につける(絶滅危惧IA類)
- 2.センカクオトギリ / 沖縄本島に自生するオトギリソウ属はすべて草本植物だが、本種のみは木本植物である(絶滅危惧IA類)
- 3.センカクハマサジ / 隆起サンゴ礁でできた海岸の岩上に自生する(絶滅危惧IA類)
- 4.センカクツツジ / 魚釣島山頂付近の岩場で赤紫色の花をつける(絶滅危惧IA類) 撮影 / 新城和治、提供 / 新納義典
- 5.センカクモグラ / 1991年に新種として記載された。個の数が他のモグラより少ないという特徴がある(絶滅危惧IA類) 撮影 / 沖縄開発庁、提供 / 新納義典
- 6.センカクサワガニ / 近縁種が台南北部・石垣島・西表島に生息し、魚釣島との地史的なつながりを示している(絶滅危惧IA類) 提供 / 琉球大学農学部園芸部

## 尖閣諸島のおもな年表

1884	吉賀辰四郎が、魚釣島などを探検
1891	伊沢矢喜太が魚釣島・久場島でアホウドリの羽毛を採取
1895	閣議で沖縄県の所轄として標杭を建ててことを決定
1896	吉賀商店が尖閣諸島に八重山支店を開店
1900	黒岩恒らが魚釣島・久場島の自然環境を調査
1918	吉賀辰四郎が死去し、子息の善次へ跡継ぎ、羽毛採取などの事業が継承される
1931	吉賀善次が4島の払い下げを申請し、認可許可される
1940	吉賀善次が事業を断念し、無人島となる
1950	高良鉄夫が魚釣島で生物相を調査(第1次調査)
1969	琉球政府が石垣市に命じ、魚釣島など5島に標杭を設置
1972	沖縄返還協定が発効され、尖閣諸島を含む南西諸島全島が返還
2010	中国漁船と海上保安庁巡視船の衝突事件発生
2012	国有化



魚釣島北斜面の景観。ピロウ・コミノクログク群落の手つかずの状態で成林している。山頂域の岩場は固有種の生息地である(1979年)

表2 尖閣諸島の植生

1. 山頂部風衝地植生	●イヌマキ・ユウコクラン群落 ●シヤンハイヤブラン群落	魚釣島
2. 高木林	●ピロウ・コミノクログク群落	魚釣島
	●ピロウ・オオクサコ群落	久場島
3. 低地部風衝地植生	●ガジュマル・アカテツ群落	魚釣島
	●コマルバガジュマル群落	久場島、南小島、北小島
4. 海浜植生	●イソフサギ群落 ●ソナムグラ・コウライシバ群落 ●アダン群落	魚釣島、南小島、北小島
5. 低地部段丘上風衝地帯	●コマルバガジュマル群落 ●アダン群落 ●ヒゲスゲ・テッポウユリ群落 ●ホノバワダン・テッポウユリ群落	久場島



7. タカサゴアガミ 8. クススヨウラクラン 台湾と魚釣島だけに自生する(絶滅危惧IA類)  
9. センカクトロアオイ 10. マメツタカスラ 日本国内では魚釣島だけに自生する(絶滅危惧IA類)  
11. シュウタ 無毒だが、分布密度は高い、1.5~2.5mにまで成長する

また、海浜植生も奄美大島以南の琉球列島の海岸植生を特徴づけるイソフサギ、ハマニガナ、ハマヒルガオなど、さらにはクサトベラ、モンバノキ群落、アダン群落への配列は、琉球列島の海岸植生の典型的な配列パターンである(表2)。

尖閣諸島の全植生は、魚釣島のピロウ・コミノクログク群落と砂浜植生のハマボツス、ハマヒルガオ群落、サング礁上のイソフサギ群落との間に各島の環境要素のちがいに、それぞれの群落が維持されているものと考えられる。ピロウが高木層を優占する群落は、与那国島や伊平屋島などにも見られるが、尖閣諸島のものは小型というちがいがあ。その理由は、島全体で風衝性が強いと考えられる。

しておらず、シユウタの分布は島の地史と関係があると思われる。また、アジア東部に限定の昆虫類、キボシカミキリは台湾の蘭嶼(紅頭島)・与那国島・石垣島・西表島および宮古島産にそれぞれ亜種レベルの変異が見られるが、尖閣諸島産のものは明らかにこれらと異なり、台湾本島産の亜種に類似している。尖

閣諸島の亜種は、台湾と尖閣諸島が陸続きであった比較的新しい地質時代に、陸路を経て台湾から入ってきたものと考えられる(尖閣諸島調査報告、白井・堂井、1977年)。

これらの報告は、いずれも台湾とかつて陸続きであったことを示唆するものであり、尖閣諸島は、生物地理学上、非常に重要な位置を占め

## 植物相

琉球列島の温暖指数(表2)は180~240度の等指数線内にあり、尖閣諸島もこの範囲内に含まれる。亜熱帯常緑広葉樹林が多く、植物社会学的にはヤブツバキクラス域(表3)に属している。

## 動物相

島の面積とそこに生息する動物の種類数は、並行的に増減する。面積が大きい島ほど環境が多様化し、各種の動物の生活にとって適した環境を提供する。

尖閣諸島の場合、最大の魚釣島でも3・8kmほどであり、海鳥類の個体数は多いものの、八重山諸島・宮古諸島・沖縄諸島・台湾で普通に見られる陸生動物で確認できない種も多い。

哺乳類では、固有種であるセンカクモグラ、セスジネズミのほか、クマネズミ、ジャコウネズミ、ハツカネズミ、クビワオオコウモリなどが魚釣島で記録されている。

鳥類では、魚釣島・南小島・北小島で32科50種が知られ、南小島ではカツオドリが、北小島ではアジサシ類がおもに繁殖している。

久場島では、カツオドリが尖閣諸島中最も多く、沿岸部のコマルバガジユマルの風衝荒原で営巣している。オオミズナギドリは内陸部のピロウ、オオクサボク群落域を中心に営巣し、その他カラスバトも確認されている(徳原、1977年)。

爬虫類は5科8種が知られており、

魚釣島では、オキナワトカゲ、スベトカゲ、アオスジトカゲ、ヤモリ、シユウダ、センカクアカマダラの6種の生息が確認されている(徳原・安島、1980年)。

移動力の弱い、ある種の陸生動物にとっては、海洋がその分散の障害になる。両生類の多くの種は、陸水地域を生活の場としている。同諸島には小溪流や湿地もあり、決して両生類の生息できる環境がないとはいえないが、両生類の生息がこれまでの調査でまったく確認されていないのは、海洋によって両生類の分散が隔離されているためと考えられる。

節足動物については、96科194種が報告されている(徳原・下謝名、1977年)。最も種類数が多いのは、昆虫類の55%と蜘蛛形類の35%である。最も個体数が多いのも、蜘蛛形類の58%と昆虫類の29%で、両者合わせて87%を占める。

北小島に自生する植物は36種(新報1980年)が確認されているだけで、尖閣諸島の中で最も少ない。海鳥類は諸島中最も多いものの、動物相は貧弱で、シユウダ、オキナワトカゲ、ハツカネズミとクマネズミが確認

されているだけである。

南小島に自生する植物は61種と貧弱で、動物相はシユウダ、ヤモリ、アオスジトカゲ、クマネズミが報告されているのみである。その他昆虫類28種、蜘蛛形類19種が確認されている(徳原・下謝名、1977年)。

久場島は、戦後、米軍の爆弾投下の演習地域に指定され、尖閣諸島中で最も人為的攪乱を受けた島である。87種の植物が確認されており、移入種としてノネコが1匹確認されている(徳原・下謝名、1977年)。

大正島における生物学的調査は、1941年に正木任氏が行なったのみで、クロアジサシ、セグロアジサシ、リュウキュウツバメ、イワツバメ、リュウキュウアカシヨウビン、ヨシゴイの6種が記録されている。



12. 段丘斜面が海鳥たちの営巣場所となる[1979年、北小島]  
13. 久場島山頂の火口跡。ホソバワダンがよく生育している[1980年]



14



15



南小島の南側。最も高い所で148m。中央部を横切る岩棚(黄色い囲み)で、1971年にアホウフリが再発見された[1979年]

14.岩場に現れたノヤギ [2012年、魚釣島] 撮影/小城春雄  
15.ヤギの食痕 [1979年、魚釣島]

### ヤギ食害による植生破壊

魚釣島に関して、最も緊急に対処すべき問題は、1978年に持ち込まれたヤギによる植生破壊の問題である。急崖をなす島の南斜面はヤギに食いつくされ、緑はまばらだ。かつて風衝低木によって保護・維持されていた斜面は、岩層をむきだし、地すべり跡のような地形をさらけだしている(写真写真参照)。

国内でのヤギ被害は、小笠原諸島の例でも明らかになっている。野生化したヤギの繁殖力は高く、採食や踏圧などの影響で島の植生は破壊され、裸地化・乾燥化による土砂の流出、景観の破壊が進み、生存する生物は著しく減少した。

しかも、その影響の進み方が速い。流出した土砂は海面を濁らせ、海底に堆積して底生生物に影響を与える

など、被害は甚大である。

魚釣島のノヤギは数百頭に増え、聞き取りをした漁夫の話では、魚釣島の近くで漁をするときヤギの臭いがし、とくに雨天の時はひどいとのことである。しかし、現状では領有権に関する問題により、魚釣島への上陸ができないことから、被害状況が把握できていない。

### 今後の課題

このノヤギによる魚釣島の生態系への影響について対策を講じるべく、日本生態学会や沖縄生物学会では関係機関への申し入れを行なっている。

解決への課題として、国はまず学術調査を再開し、ヤギの頭数や繁殖状況および植生への被害状況を調査し、その実態を把握すべきである。そのうえで、尖閣諸島の総合利用推進を基軸にした長期的なヤギ排除、植生回復事業の基本計画を策定することが望まれる。

海洋島を生息地とする種は隔離性が高く、種分化の過程や適応放散(※4)などを検討するうえで非常に貴重な生物群である。また、北限種や南限種の生息域の縮小につながるよう

な環境破壊は、種の遺伝的な多様性の減少、ひいては種の絶滅につながることも考慮する必要がある。

尖閣諸島の自然は、そこにすむ生物と、亜熱帯海洋の環境に対する適応を見出す重要な場所と考えることもできる。尖閣諸島の環境保全の問題は沖縄1県のみで考えるのではなく、国の機関が積極的に関与すべき問題である。

- ※1 陸橋 地殻変動や気候変動によって海面が低下して、大陸と島がつながり、生物が移動できるようになった陸地のこと
- ※2 温暖指数 その地域での植物の生育に必要な気温を表わす指数。15、45が亜寒帯(針葉樹)、45、85が冷温帯(落葉広葉樹)、85、180が暖温帯(常緑広葉樹林)、180、240が熱帯(亜熱帯樹林)に属する
- ※3 ヤブツバキクラス域 日本の植生区分は、高山草域(高山草帯とハイマツ帯)、コケモモ・トウヒクラス域(重高山針葉樹林域)、ブナクラス域(落葉広葉樹林域)、ヤブツバキクラス域(常緑広葉樹林域)に大別される
- ※4 適応放散 同一の祖先をもつ生物が、進化過程において、さまざまな環境に適応・分化し、別系統になること

新納義典(いろうよしな) 1925年鹿児島県奄美大島生まれ。琉球大学卒業後、同大教授を経て現在名誉教授。専攻は植物社会学。沖縄県文化財保護審議会委員、自然環境保全審議会委員等を歴任。尖閣諸島へは6回渡島調査している。沖縄県史の植生の項で尖閣諸島について担当。尖閣諸島文献資料編編集委員長、沖縄生物学会監事。



セグロアジサシのコロニー。石ころのように見えるのはすべて鳥。斜面を埋めつくすほどだ〔1960～70年代前半、北小島〕 撮影／不明、提供／高島鉄夫

## Ⅱ 海鳥の重要な繁殖地・尖閣諸島

自然保護室 山本裕

### 尖閣諸島で見られる海鳥

大陸や他の島嶼から隔離されてきた尖閣諸島は、海鳥の重要な繁殖地となっている。

古くは、魚釣島・久場島など4島で、アホウドリ、クロアシアホウドリが繁殖し、また南小島・北小島ではアジサシ類やカツオドリ類の大規模なコロニーが見られ、「鳥島」とも呼ばれていた。

1953～80年の間に、6回の上陸調査を行なった尖閣諸島文献資料編纂会の新納義馬氏(3～7頁執筆)によると、以前は実に海鳥が多く、53年の調査当時、北小島ではアジサシ類、なかでもセグロアジサシが多く、約100万羽が生息し、南小島ではカツオドリが多く、約50万羽が繁殖していたという。

北小島では、セグロアジサシ、オオアジサシ、クロアジサシ、アホウドリ、クロアシアホウドリ、カツオドリ、アオツラカツオドリが繁殖し、南小島

では、カツオドリ、クロアジサシ、セグロアジサシ、アホウドリ、クロアシアホウドリ、オオミズナギドリ、アオツラカツオドリなどが繁殖していることが確認されている(高島、1969年および尖閣諸島文献資料編纂会、2011年)。

また、北小島ではアカオネツタイチョウ、久場島ではアナドリの繁殖も記録されている。

一方で、海鳥が次第に減少していく様子も報告されており、北小島のセグロアジサシは、1953年の100万羽から、63年には50万羽、68年には20万羽に減っている。当時、台湾漁民により海鳥の卵が継続的に乱獲されており、おもに菓子の原料にされていた。

領有権に関する問題のため上陸はできていないが、最近では2012年9月に東京都がボートで島を周回しながらの洋上調査を行ない、魚釣島で9種50羽、北小島で4種48羽、南小島で7種983羽の鳥類

表 尖閣諸島で繁殖するおもな海鳥

種名・学名	南小島	北小島	南小島	久場島	大正島
アホウドリ	●	●	●	●	
クロアシアホウドリ	●	●	●	●	
オオミズナギドリ	●		●	●	
カツオドリ		●	●	●	●
アオツラカツオドリ		●	●		
セグロアジサシ		●	●		●
クロアジサシ		●	●	●	●
オオアジサシ		●			
アナドリ				●	
アカオネツタイチョウ		●			

高島(1969)および尖閣諸島文献資料編纂会(2011)より作成。●は過去に記録がある種



を観察した(東京都知事本局、2011年)。  
調査が行なわれた時期には海鳥類の繁殖はほぼ終わっていたが、南小島・北小島を中心にアジサシ類やカツオドリ類が観察された。なかでもオオアジサシが最も多く、南小島で340羽、北小島で214羽、次いでカツオドリが多く、南小島で312羽、北小島で129羽が確認された。この他にクロアジサシ、アオツラカツオドリ、加えてクロサギ、ダイサギ、コサギなどサギ類6種が記録されている。

### 羽毛採取で激減したアホウドリ

尖閣諸島を特徴づける海鳥は、なんとといってもアホウドリである。同島

は伊豆諸島の鳥島に次ぐ繁殖地だが、鳥島同様、羽毛採取を目的にした乱獲によりその数を大きく減らした。

1891年以降、羽毛が採取され、1897~1907年までの11年間には158トン(推定105万羽分)の羽毛が採取されたという記録が残っている。1909年には魚釣島2か所、久場島4か所のみで細々と繁殖していると報告され、39、63、70年には生息が確認されず、その後71年に北小島・南小島で再発見され、徐々に回復し、現在に至っている。2006・07年の繁殖期の推定個体数は約440羽とされている(Chittelle International 2012年)。

最近のDNA研究から、尖閣諸島と伊豆諸島・鳥島のアホウドリは遺伝的な構成がちがう個体群であること、また断片的な観察ながらも、尖閣諸島のほうが小型で細身であることや、求愛のダンスがちがう可能性が報告されている(江田・樋口、2012年)。しかし、島に立ち入りができないことから、詳細な生態や繁殖状況の現状については十分に把握されていない。



1.抱卵するカツオドリ[1979年、南小島]  
2.カツオドリのヒナ[1979年、南小島]



1(★)



## IBAとしての尖閣諸島

前述のように、尖閣諸島には希少種を含む海鳥が数多く繁殖しており、日本で167か所選定されているIBA (Important Bird Areas 重要野鳥生息地) のうちの1つになっている。

IBAは、鳥類を指標とした国際的かつ科学的な基準(「IBA基準」)で、野鳥の生息に重要な自然環境をリストアップしたものだ。このIBAは、国際的な鳥類保護団体であるバードライフ・インターナショナル(本部:イギリス)が当会を含む100か国以上の加盟団体と共同で、法的な保全と持続的管理を目指している。

尖閣諸島の選定理由としては、以下が挙げられる。

①基準A1:「レッドデータブック種の生息地」であること(アホウドリ、オオアジサシ、アオツラカツオドリが該当)

②基準A4:「渡り鳥が利用する生息地」であることで、生物地理的個体群の1%が生息し(オオアジサシが該当)、世界の個体数の1%以上が生息していること(アホウドリ、カツオドリが該当)

## ヤギ食害は海鳥減少にも影響

魚釣島のノヤギによる食害が植生に甚大な被害を与えていることは7頁で述べられているが、海鳥にとっても無関係ではない。

魚釣島で繁殖するオオミズナギドリは、通常やわらかな表層土に巣穴を掘って卵を産む。採食圧や踏圧によつて樹林地がなくなると、降雨などにより表層土が流出しやすくなる。その下にある固い地盤には巣を掘ることができないし、また流出土によつてコロニーそのものが埋まってしまいう可能性もある。

海鳥は陸島とくらべて一回の産卵数が少なく、繁殖開始年齢も遅いため、一度減少した個体数を回復させることは容易ではない。現在は島への立ち入りができず、繁殖状況には不明な点が多いが、国境に関係なく海上を自由に行き交う海鳥にとつて、この地が重要な繁殖地であることに変わりはない。

この島の自然を守っていくためには、国境の枠にとらわれない国際的な機関や研究者、NGOの協力による学術調査や保護活動が求められる。

3.アホウドリの若鳥とヒナ[2002年2月、南小島] 撮影/水島邦夫

4.繁殖のため島に戻ってきたと思われるアホウドリ[2012年10月、南小島付近] 撮影/仲間均 5.アホウドリの若鳥[2002年2月、南小島] 撮影/水島邦夫





進む森林の寛廃と表層土の流出

〔2012年、魚釣島〕 撮影／小城春雄

ヤギの食害によりビロウ樹林が後退し、荒生のようになっている（写真上）。雑地化が進むと、表層土が流出し（写真下）、海鳥たちのコロニーが覆われてしまう



6.空を覆いつくすセグロアジサシの群れ〔1939年、北小島〕  
提供／正木謙、所蔵／国立公文書館

7.オオアジサシのコロニー〔1979年、北小島〕

8.セグロアジサシ〔1980年、久場島〕

9.断崖で休むカツオドリ群れ〔2012年、北小島〕

撮影／小城春雄

10.溶岩の隙間を利用して営巣するオオミスズナドリ。通常は土中に穴を掘り産卵する〔1980年、久場島〕

◎IBA基準:

■A1基準—レッドデータブック種の生息地 アジア版レッドデータブック種が多数生息している地域

■A2基準—地域限定種・固有種の生息地 生息分布域が限られている種(世界的な分布域が50,000km<sup>2</sup>未満の種)が複数種生息するか、生息している可能性がある地域

■A3基準—バイオーム種の生息地 日本は「高緯度森林地帯」と「北東アジア温帯林」に区分されるが、これらの領域をその生息域の全体もしくは大半とする種が、複数種生息するか、生息している可能性がある地域

■A4基準—渡り鳥が利用する生息地 水鳥や海鳥が2万羽以上、もしくは個体数の1%以上が利用する生息地。渡りの経路上で地理的の要因により、多数の渡り鳥が集中する地域(ホトルネック)も含む

(参考資料)

●BirdLife International. 2012. *Phoebastria albatrus*.

In: IUCN 2012 IUCN Red List of Threatened Species Version 2012.2. <http://www.iucnredlist.org>, accessed 2013-01-21.

●江藤真樹・福口広芳. 2012. 魚釣島アカウミトビ*Phoebastria albatrus*は2種か5種か? 日本鳥学会誌, 61(2):263-272.

●尾谷川博. 2003. 50羽から5000羽へ アホウヅリの個体増加をめぐって. 23-ぶつ社, 東京, 222p.

●尖閣諸島文献資料編纂委員会. 2011. 尖閣研究. 尖閣諸島文献資料編纂委員会, 初版, 279pp.

●高良幹夫. 1989. 尖閣列島の海鳥について. 琉球大学農学部学術報告, 16:1-11.

●東京都知事公報. 2012. 東京都尖閣諸島現地調査 調査報告書. 東京都, 東京, 132pp.

●横田泰志・横田昌嗣・土田英利. 2012. 尖閣諸島魚釣島の生物種と野生化への問題. <http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/Pub/42/16Yokohata.pdf>.



## Ⅲ 島と人との関わり

八重山日報編集長 仲新城誠

### 「忘れられた島」

「尖閣諸島を世界自然遺産にしよ」という構想が、地元沖縄県石垣市でささやかにはじめている。地元住民だけでなく、多くの日本人にとって「忘れられた島」「未知の島」である尖閣を地域振興に生かし、併せて実効支配を強化しようという取り組みだ。

尖閣は市民にとって、必ずしも身近な存在ではない。小型の漁船で石垣島の港を出ると、周辺海域まで約8時間。冬場だと荒波に阻まれて接近は不可能になる。さらに周辺海域を警備する海上保安庁により、一般人の上陸は禁止されている。

70年以上にわたって無人島だったために、尖閣には貴重な生態系がほぼ手つかずで残されている。その重要性が地元で再認識されるようになったのも、ごく最近のことだ。

### 近年高まる領土意識

魚釣島に燈台工場などを建設した

古賀一族は1940年に事業継続を断念し、尖閣は無人島となった。しかし、戦後も一般人が普通に上陸していたという。69年には、石垣市が戦時中の遭難者の慰霊祭を魚釣島で開き、慰霊碑も建立している。尖閣をめぐる国際的な緊張状態がはじまり、一般人の上陸が不可能になったのは、中国、台湾が領有権を主張しはじめた70年代以降だ。

領有権をめぐる対立がある地域では、住民の「ここは私たちのものだ」という領土意識が強化されるのが普通だが、石垣市では事態は逆だった。日中間で問題を棚上げしたことが影響したのか、意識的に尖閣について触れない雰囲気があった。尖閣は、どんどん忘れられた島になっていく。

学校現場では、現在でもほとんど尖閣について教えられていない。尖閣が5つの島で構成されることや、たとえば魚釣島に「石垣市登野城2392番」という番地がついていることな

どを、ほとんどの住民が知らない。

しかし近年、地元でもようやく尖閣を見直す気運が高まりつつある。皮肉なことだが、きっかけは紛争激化である。

石垣市は、尖閣が政府の閣議決定で沖縄県に編入された1895年1月14日を「尖閣諸島開拓の日」と命名。2年前から毎年、記念式典を開催しており、住民の領土意識の喚起に本腰を入れはじめた。

現在、周辺海域の活用ビジョンを示す「海洋基本計画」の策定も進めている。尖閣の「活用」についても盛り込む方向だ。

### 尖閣を自然遺産に

尖閣を今後、市民のためにどう活用するかについては、大きく三つの考え方があがる。

まず第一に、豊かな漁業資源の活用である。周辺海域で漁業者がいつでも漁をできるような環境を整備し、落ち込んでいる漁獲量の回復を目指す。

第二に、周辺海域に埋蔵されている可能性がある石油などの海底資源の活用である。昨年10月、石垣市で



魚釣島、北側[2012年] 撮影/東京都



1.古賀開拓村の住民、和平山(魚釣島)事務所の前で[明治末期ごろ]「望郷 沖縄」より、国立公文書館所蔵  
2.1969年、魚釣島に建てられた行政区画標柱[1979年] 撮影/新納春馬

## 漁業の問題

尖閣諸島周辺海域は豊かな漁場として知られる。マグロ、カツオのほか、沖縄で高級魚とされるアカマチを含むマチ類、アカジン、マクブ、さらには夜光貝も多く生息する。

統計資料によると、1977年には沖縄本島や石垣島などの漁船168隻が周辺海域で操業。15億1600万円もの水揚げがあり、漁場として活発に利用されていたことがうかがえる。

しかし漁業者によると、その後の燃料費高騰や魚価の低迷を受け、現在、尖閣周辺での操業はほとんど行われていない。

高い燃料費と長時間をかけて尖閣周辺に向かっても、悪天候だと手ぶらで引き返さなくてはならず、リスクが大きくなってしまったのだ。漁場を再び活用する方策として、地元、八重山漁協の上原亀一組合長は「漁業者の要望は、尖閣諸島に港・無線施設・気象観測所・灯台を整備してほしいということに尽きる」と指摘する。

尖閣周辺で獲れた魚をブランド化することで、販路を拡大しようとする取り組みもはじまっている。尖閣周辺で操業しようという漁業者の意欲をかき立てる取り組みだが、「尖閣」の商標登録をめくり、漁協と民間企業が対立する事態も発生。ブランド化への道は容易ではなさそうだ。

尖閣周辺で操業する台湾漁船も悩みの種だ。70年代の漁法は一本釣りが主流だったが、マグロの延縄漁が普及するにつれ、10年ほど前から台湾漁船が地元の延縄を切断するトラブルが頻発。海上保安庁が取り締まりの強化に乗り出したが、台湾側は逆に反発し、2012年9月には漁船団が大挙して尖閣周辺に押しかけた。

しかし、領有権を主張して譲らない中国とは異なり、台湾とは漁業協定の締結で妥協する余地があると見られている。漁業者は「尖閣周辺で操業する台湾漁船は、地元漁船より圧倒的に数が多い。操業海域を厳密に決定する必要がある」と話す。

(仲新城 誠)

開かれた全国青年市長会では、尖閣周辺で石油資源を開発する場合、開発拠点を石垣市に誘致することを求めることを決議した。現時点での実

その一つだ。中山義隆石垣市長は「ユネスコが認めてくれれば、尖閣の貴重な動植物を保護でき、日本の領土だということも明確になる」と前向

きだ。石垣島と尖閣を往復する遊覧船の運航など、関係者の夢は膨らむ。国は「奄美・琉球諸島」の世界自然遺産登録を目指し、現在、石垣島に隣接する竹富町(※)の島々の国立公園化を進めている。その延長線上で取り組もうというアイデアだ。ただ、世界自然遺産構想に対しては、必要性も含め賛否両論がある。今後、住民レベルでどこまで盛り上がりを図れるかがカギになるだろう。

※竹富町 竹富島、小浜島、西表島などの有人島9つと、無人島7つから構成される



魚釣島南側の美しい海と河湾 [2012年]  
撮影 / 山本皓一

現性は低いですが、開発が生む経済効果や雇用効果に期待する声もある。そして第三が、観光資源としての活用である。尖閣をユネスコの世界自然遺産に登録する構想も、

必要も含め賛否両論がある。今後、住民レベルでどこまで盛り上がりを図れるかがカギになるだろう。

